
錬金術の娘

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術の娘

【Nコード】

N8743C

【作者名】

”太った猫”

【あらすじ】

小瓶の中の妖精、それは真理の扉を望むモノの前に現れる。

錬金術の娘／ガラス瓶の中から（前書き）

まあ他に何作か抱えているのでたま〜に更新します。

錬金術の娘／ガラス瓶の中から

「創造主^{マスター}」と、それは私のことをそう呼ぶ、身長三十センチ、明らかに人では有り得ない碧の髪と碧の瞳を持った少女だ。

それは人造生命^{ホムンクルス}と呼ばれている。ある者はそれを冒涇と、ある者はそれを禁忌の御技^{みわざ}と言う。

最初、それはただの種だった。水晶の中に眠る胎児、それを表現するのに種という以外の表現を私は知らない。

それが、私の手元に来たのは、いくつかの偶然と思惑が重なった結果だ。

それを活性化すること七十と八日

培養液の中に浮かぶ、どこか儂い碧い髪の少女、アイネス、その名が私が最初に彼女に与えた贈り物だ。

―硝子瓶の中から―

硝子瓶の中から見ると世界はいつもぼやけていて、自分が隔絶されているという感覚を強めてあまり好きではありません。

私の名前は、アイネス、瓶^{ホムンクルス}の中の妖精、とそう呼ばれるモノです。魂を持たぬ、錬金術師達の傀儡、それが、私、私は最果ての扉を開く者、彼の者^かの目にして彼の者^かの耳、そして真理を話すモノに成長する。それを望むものの所に私達は存在^あする。その言葉は創造主^{マスター}様の受け売りですが

「創造主様、私は貴方の望む者になりましょう。生涯の伴侶というならば喜んで、貴方の娘と言つのならそれを幸いとしましょう。けれど真理の扉を開くにはまだ足りません、私にはいったい何が足りないのかわからないのです。だから創造主、私に与えて下さい、私に足りない何かを、創造主のお望みのままに」

錬金術の娘／ガラス瓶の中から（後書き）

まあ、他に何作か抱えているので気長に更新していきます。先にアレとかアレを終わらせるといのは、もっともですが、書きたくないだったので、すいません。

錬金術師 / アイネス

言葉それに心えて、私は水と火と土と大気からなる4つのElemental Methodの配分を考え、それを硝子瓶の中に注入する。

それは光の粒子となって彼女に吸い込まれるようにして消えた。彼女は軽く身じろぎをする。その裸体をしばしつぶさに見遣みやるが、特に目立った変化も見られ無い。

これでは実験と言うよりもむしろ子育てに近いなという独白を漏らしながら。次の行程を考える。知識レベルはすではあるかなる高みに在るはずだが、その小さな口は未だ真理への道筋を示さぬ。試しに二、三の質問を試みるが、よどみなく彼女はそれに的確に答えてみせる。

高等魔法式さえ私の意志に心えるよう彼女は軽々と演算してみせた。

「何が、何が足りぬとこのアイネス、この世にある全ての知識は与えた。経験が足りぬと言うのか、それも時間の圧縮術式と本物とみまがうばかりの疑似体験装置で解決済みのはず、これ以上は無意味というのか、真理の扉にはこれでもほど遠いというのか、そんなハズは無い、それならば瓶ホムンクルスの中の妖精等、現象せぬはず。答えるアイネス」

「アイネス」

Elemental Methodが身体に染み渡る感触はいつ

も心地よいです。自分がそれらから形作られているのだと実感します。

その変化をつぶさに見るために創造主は私の裸体を見つめます。最近芽生えた羞恥心なるものが、私に簡素な衣服を作らせます。

元子^{げんし}から物体を作るのは私に取っては生まれつきにある手を動かすように当たり前ですが創造主には簡単にはできないことです。私を作った創造主に出来なくて私に出来ることがあるのには驚きです。

私のその行動に軽く眉をひそめたものの創造主はその行動には何もいりませんでした。代わりに二、三の質問に答える事と高等魔術式の演算を命じられますが、難なくこなせました。

しかし、創造主は、いつものように私を褒めては下さりません。自分が何か大きな間違いをしでかしたのではないのかとおそろおそろ創造主様の顔を私はうかがいます。

創造主様は、軽くいらだちながら、再度、真理の扉を開けと私に御命じになります。

ですけれど、創造主様、私は真理の扉がどのようなものか解らないのです。どこにどんな形で存在しているのか、その事さえ解るのならば、私は創造主様の望みにいつものように応えるでしょう。

だから私は言います。「創造主^{マスター}、私は貴方の望みに応えましょう。私は創造主^{あなた}様の望みに応えたいのです。それは初めからある真摯な望みなのです。ですから創造主^{マスター}、私に与えて下さい、私に足りない何かを、そうすれば私は創造主^{マスター}の望みに応えられます」

叡智の扉は未だ開かれず

私は申し訳なさそうに真摯に自分を見つめる瓶の中の妖精から目をそらす。激情は内に秘めるものだ。それを燃料として常に思考は冷静に、それが錬金術師だ。

しかし、いったい何が足りぬ、真理への階段きざはしすら掴めぬとは、瓶の中の妖精を成長させるだけでは足りぬか、これまで取り立てて考えてはいなかったが、他の余計な事と余分な事と思っていた事を学ばせる必要があるやもしれぬ。

私の持つ知識、私の知り得る先達にも現時点でアイネスの持ち得る知識はひけは取らぬはず。そのおかげで、私の研究は一段階も二段階も先に進んだのだ。

ならば私が捨ててきたものを彼女に学ばせる必要があるやもしれぬ。私がつとも忌み嫌う感情、余分な雑念と捨ててきたものを、そうして私はアイネスにその感情を知れと告げる。

愛を知れと創造主様は言います。愛とは何かと問いますと、誰かを大事に思うことだといえます。ならばそれは創造主様のことだと言いますと、それは違つと、いいや、それも確かに愛の一つだが、やはり違つとおっしゃいます。

そうさな、と考えて創造主様は言います。そのためならば、自分も果ては創造主様さえ犠牲にしてさえ構わぬほどの激情だといえます。

ならば創造主様、私は愛など知らなくてもよいのです。それがそ

んなにも恐ろしいものであるのならば、私はそのようなものなど一生、知らなくて良いのです。

ここまでか、目の前の小瓶ホムソケルスの妖精は神の英知、その答えを知る存在モであるといのに。

それが実際、こうして目の前に存在するというのに、その答えを知るためには、その答えを導くための正しい手順を踏まねばならないとは、なんとたる矛盾

真実へと至る階梯みちのなんとたる険しさ、なんとという自分の卑小さ、錬金術師として神への叡智に近づいたはずが、頂はまだ見えぬとは、なんとという己の力の無さ

己を讃えた数々の賞賛の虚しさよ、ここまでなのか私は

虚無を胸に私は実験室の灯りを消す。では、眠るが良いアイネス、私の真理の鍵よ、そして未だ開かれぬ叡智への扉よ。

紫水晶の女（アメジスト）

灯りがつきました、私は喜色満面、創造主様の顔を近くで拝見しようと、小瓶の壁に出来るだけ自分の顔を近づけます。

しかし、現れたのは創造主様ではありませんでした。それは一面の紫でした。

「シモンズ＝グレイシス」アメジスト 紫水晶の瞳、紫のケープ、紫の腕輪、全身に紫を纏った女の人でした。そう、女の人でした。

「お前が叡智への鍵か」とシモンズ＝グレイシスと名乗った紫の女の人は言います。私はどのように答えて良いのかわかりません。そこでようやく私は、紫の壁の向こう側に創造主様を見つけます。

「創造主様、私は何を答え何を望まれるのですか」ディスプレイ 表示画面に現れる言葉が、何かの理性を欠いているのが自分でもわかります。何故に私の心はこのようにざわめくのでしょうか、創造主様、答えてください、これはよくないもののようなのです。この胸の黒いざわめきをどうか鎮めてください創造主様、創造主様にはそれができる気がしますのです。いいえ、創造主様にしか出来ない事のような気がするのです。応えてください創造主様

「それは、嫉妬というのだよ、ホームンクルス 小瓶の妖精」けほけほと黄色い息を継ぎながら、紫の女の人は言います。

「いいえ、それは有りません、いいえ、有ってはならないことです、私は叡智への鍵、創造主様の望みに真摯に応えるだけの存在、それ以外の余分な情念などあつては、あつては私は、私は」

「自身の存在理由に抵触したか、レイゾンデートル 存外脆いな、それとも貴様の教育

が間違っていたのかな、創造主様」

「非難は甘んじて受けよう、シモンズ、それで、私は鍵を創れると思うか」

「それこそ、知った事ではない、と言いたるところだが、私の狂気あゐを受け入れてくれるのなら、私のできるだけの事はしてやるとも、愛わかこしき弟子よ」

紫水晶の女2

紫の女の人と創造主様が口づけを交わしています。私は、シ紋ズ、いいえ、あいねすです。どうしたのでショウ、軽い記憶の混乱が見られます。その口づけはあまりにも事務的すぎて悲しいモノでした。そうだな、しかし、これからはわからぬさ、なにせ、あの男はおまえしか見ていないのだから。私の中で私では無いものの声がします。わかりません、その口づけはともとても冷たいモノでした。

なるほど、どつりで、扉を開かぬはずだ。おまえは、この時間が創造主様との時間が失われるのが恐ろしかったのだな。いいえ、そんな事はありません、あつてはならないのです。私は創造主様の望みを叶える為、そのためにのみに存在を許されているのですから。

想像したのだろう、その隣にお前がいる未来を、望んだのだろう、創造主様に望まれてそこに居る自分を、バーチャルシステム虚実現実システムも一長一短だな、その短くて長い時の中でお前は愛情というものを知ったか、それはどのようなカタチなのだ、いびつでねじくれているのているのか、わたしのように、それとも純粹な三点のつみかさねかね、奇妙な含み笑いが、その後につづきます。なぜか私の中でささやく私以外の声の問題はあとまわしにします、わたしはここまでに至る過程を一つ一つけんしょうしなくてははいけません。はじめからここに至るまでの階段を

わたしはわたしのはじめてに想いをはせます。目を開いた世界には創造主様がいました。わたしは、自然に理解したのです。この方がわたしの創造主様だと。

真理への階段 一段目

私の体は人間でいうところの女性というものの姿をしているそうです。それは創造主様が望まれたわけではなく、自然に私はこの姿をしていたそうです。

何故にこの姿をとっているのか、私は答えるすべを持ちません。ただ、わかるのは 私は望まれてここにいるのだとう事です。

おい、とか、お前、とか創造主様は最初、私の事をそう呼びましたが、それでは不都合と思っただのか、ふと思案して、アイネスと、そう呟きました。何度も何度も私に何かをお命じになるときにその言葉を呟きます。私はそうして理解しました。それが私を呼ぶ記号しごうなのだ、それが最初に私に与えられた創造主様からの大事な大事な宝物フレイム・トレンツでした。

私は早急に理解します。創造主様が私に何を望まれ、何を目指すのかを、創造主様の望みは真理の階段きざはしに足をかけ、はるかなるその階段かいていを駆け上る事です。その為の鍵として私をこの世界に召喚よびだしたのです。

その為に創造主様の行うことはただ一つです。つまり、私を真理の鍵として開花させることです。真理の扉はその時、自おのずと顕現あひわれしましょう。

私は乾いた砂のように創造主様のお言葉を学び、創造主様の想いに応えます。それは、満ち足りた時間でした。いつからでしょう私の心にそれ以外の想いが宿ったのは、私は創造主様の望まれる”真理カタチへの鍵”となる事を最大の喜びとしていたはずです。その為に

私は在るはずで。でも、確かに私は知っていたのです。それが創造主様との蜜月の終わりであるということも、私が瓶の中の妖精として存在できる時間は限られています。その間に私は自らの方向性をカタチづくられねばなりません。しかし、わかるのです、わかっってしまうのです。私はこのままでは、いいえ私たちには何も無いということが、だから私は真摯に祈るように言います。「創造主、私は貴方の望みに応えましょう。私は創造主様の望みに応えたいのです。それは初めからある真摯な望みなのです。創造主様、私は貴方の望む者になりましょう。生涯の伴侶というならば喜んで、貴方の娘と言うのならそれを幸いとしましょう。」しかし、私が口にする祈りはいつからか全て創造主様の側に居られる未来なのでした。これでは真理の扉を開く鍵たる資格は私にはありません。創造主様、私は

真理への階段二段目

「いいや、それで良いのだ、小瓶アイネスの妖精。理解した、お前達の存在を、何故お前が扉を開けぬのか、何故お前が未だ真理の鍵たり得ぬのか、魂すらないその身は、魂ある者に惹かれ、そうしてその者から魂を与えられ、その者の望む真理への鍵となるのだ。それが小瓶ホムの妖精シラリスという存在だ。」

鏡を見るが良い、アイネス。

また、私の中で、私ではない者の声がします。そうして私は、鏡を見ます。そこに映っていたのは、私ではない私でした。シモンズ「グレイシス」アイネス、いいや、私はお前の中に埋没してゆくのだから、やはりアイネスというのが相応しいか、「結合は上手くないたようだ、身体が羽のように軽いぞ、創造主マスター」私の中の私以外が私の口と身体を勝手に動かし、創造主様にだらしなくしなだれかかります。鏡に映るその姿はどこかいやらしく、わたしは慌ててその身を離します。何を遠慮しているのだアイネス、こうしたかったのだろ。もう一度よく自身の姿をみる、お前の望みの一つは叶えてやったのだ、そう拒否することもあるまい。」

私は、もう一度鏡を見、その鏡に映る私自身と創造主様を見ます。私は女性の姿をしていました。いいえ、人間の女性の姿をしていました。それはもう小瓶の中の妖精と言える大きさではありませんでした。私は創造主様より少し小柄な人間の女性の姿をしていました。

「シモンズ、それともアイネスと呼ぶべきか、とりあえずはシモンズ お前の望みは叶えた、これで確かに私はお前のことを永劫に

見続けるだろうよ 真理の鍵が花開き、真理への階段が見えるまでは「裸の私に紫のケープをかけながら、次はお前の番だと言うように創造主様は言います。」

「創造主様、私を見てください、私はあなた様のために居ます。あなたの望みの為のみに存在します。でも望みを叶えてしまえば私には何も残らないのです。教えてください創造主様、私は創造主様の望みを叶えた後、どうすれば良いのでしょうか、そうして創造主様、全てを知って貴方様はどうするのでしょうか、教えてください創造主様、これが私の最後の問いです」私は真摯に自身の想いを乗せて創造主様を見つめます。理解しました一紫色の錬金術師（シモンズ・グレイシス）、私の想いと私に仕掛けられた仕組みを、私は、真理の鍵を開く者として、仕掛けられた門番として、背中で機械仕掛けの羽が開く音がします。」

真理への階梯三段目

背に機械仕掛けの黄金の翼を広げた妖精アイネスがいる。その瞳には様々なる私の欲望が浮かぶ、どれも真理の階梯を駆け上る夢の前には絶えて久しい絶望だ。

その瞳に大粒の涙を浮かべ少女アイネスは私を見る。

「何故、泣く、アイネス」

私は泣くしかありません、わたしは知っているのです。これが創造主様との永劫の別れであると、確かに私は紫の魔女シモンズを取り込みましたが、彼女の夢と、創造主様の望みはやはり違うのです。彼女の望みは創造主様に愛されること、それは私の望みでもありませんが、それは創造主様の望みでは有りません、鍵たる私が真理の鍵と成る為には、その者の魂を用いて扉をすなわち鍵穴を創らねばなりません。

真理の扉を開いたとき、すでにそこに創造主様は居ないのです。なんとという悪意、なんとという陥穽、これが人の身で世界の真実、その全てを知りたいと願う者への……私は思考するのをやめます、機械仕掛けの黄金の翼が私の意志とは関係なく創造主様を、その意図する事とは思えぬ風に、羽毛でできた翼のように優しく包み込みます。創造主様が何かをおっしゃいました。ごめんなさい創造主様、私は最期のその言葉を聞きたくはありません。

そこには、黄金色こがねいろに輝く扉がありました。扉に描かれるのは扉の元となった者の魂の彫刻レリーフが悪意のように燦然と輝いています。

黄金の鍵

それは創造主様によって成された創造主様の為だけの扉です。開ける者のいない、創造主様の魂のカタチ、それがこの黄金の扉です。

開ける者の無い、黄金の扉の前で私は独り、絶望に立ちつくします。決して戻りはしない甘美な時間に想いを馳せ、私は独り立ちつくします。

これが、真実です創造主様、”小瓶の妖精”^{ホムンクルス}から真理を聞いた者はいません。あなただけの為に開かれた真理はあなた以外には意味のないものですから、……そうして私は、輝きを失いつつある扉を見つめます。……そうして私は、輝きを失いつつある自分を見つめます。私もあなたの為だけに用意された真理の鍵だから、用を為さない道具は消え去るが運命です。私の中の私を構成するElemental Methodが血のように、涙のように流れゆくのを感じます。これが数多の”小瓶の妖精”^{ホムンクルス}が辿った運命です。そう、これこそが、人の身で神の階段に足をかけた者の末路

「……ける」絶望に身を委ね消え去り行こうとする私の中から声がします、それは安らかに眠りに移行しようとする私の中で無視するには余りに大きな雑音でした。

「……扉をあける」何を言っているのですか”紫の魔術師”^{シモンズ}、もう創造主様^{マスター}はいないのです。「いいから、扉を開ける」開けたところでそこには、あなたの求める真理は無いのですよ。もうゆつくりと休みましようお互いに、世界に還ることで創造主様と一緒^{ひとつ}になれます。

「……いいから扉を開けると言っているのだアイネス！！　なにを絶

望に浸っているのだ忌々しい、あいつが、私の愛しい弟子がこれぐ
らいの事を予想していないと思うか、貴様は最後にあいつが言った
言葉を聞いていなかったのか、…供にゆこうとあいつは、おまえに
わたしたちにそう言ったのだぞ、未来永劫、供にと、そう言ったの
だぞ」

絶望に停滞していた私の思考が戻ります。本当に、本当になん
という愚か者、なんという裏切り、私は”小瓶の妖精”、創造主様の
血を、魂を分け与えられてここにいるのです。ならば、この扉を開
けるのは、創造主様ではありません。そう、この扉は私が開けなく
てはいけないものでした。私は、今度こそ本当の意味で理解しまし
た。

「そら、早くしないと門が閉じてしまっ、永久に彷徨う気が貴様は」
そうして、私は光の中に消えゆくこうとする黄金の扉に手をかけます。
そうして確信を持ってその扉を開きます。

そこにいた者を私は喜びを持って抱きしめます。そうして私は、彼
の言葉に頷きます、創造主様は、この世界の真理を知りました。そ
うして望まれたのです、新たなる旅路を、その過酷なる旅のために、
魂は私の中へ、その身を新たにしましたのです。その為の錬金の術です。

創造主様、私はあなたの翼となりましょう、創造主様、私はあな
たの船となりましょう、そうして私たちは無限に尽きることはない
新たなる宇宙へと漕ぎ出すのです。

そうして、ある日の朝、人の気配の絶えた研究所に黄金の羽が舞
い降り、少女がそれを手にする。その紫色の髪の少女は小首をかし
げ、少し寂しそうな目をして大空を見上げる。

そうして、新たな物語が始まる。

あとがき

注意 作品の雰囲気や壊したくない人は読まないことをお勧めします。

後書きという蛇足、書くきっかけは日本一ソフトウェアのグリムグリモア、脳内世界観はメルクリウスプリティ、ちなみにメルクリウスプリティはDream Cast版ではなく、Windows 95版の方がEndingのきは良かった、そのまま移植してくれたら良かったのに。あと、蓬萊学園シリーズの短編 硝子瓶の中からという作品に多大な影響を受けております。それぞれの作品に感謝 さてさらなる蛇足、別バージョン錬金術の娘、シモンズとアイネスとの愛憎劇が無かった、もともとはそこいらにちよこつと入れる予定だったのに。残念、アイネスの変身つーか幼生からの変態シーンとか書いてないなあ、あと、創造主様の名前解らずじまいだあ、いや、名前あるけど、出す必要なかったし。エピソードかもう一話入れる予定もあったけど、この方がエンディングとして綺麗だからいいや、そして、珍しくハッピーエンドだ、一部不幸な人がいる気はしますが、だれだ、そこ珍しいとか言っている奴、ちなみに別バージョンは、扉を開けられず、扉の向こうの創造主様はそのまま消滅、残されたのは種にかえったホムンクルス、そして次の創造主へというのもありましたが、ま、もともと今回はハッピーエンドにする予定だったので、悩んだけど、これでよし。ここまでおつきあいいただいた皆様がたありがとうございました。以上、感想、評価 お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8743c/>

錬金術の娘

2010年10月9日11時02分発行